

70年のニセ情報：いかにCIAがヨーロッパのオピニオン雑誌を援助したか

【訳者注】CIAが、ニセ情報をヨーロッパにどう売りつけ、信じ込ませようとしたか、その戦略の歴史を知っている古参の、元CIA職員が語る物語は貴重である。これを逆の立場だった、ヨーロッパの記者ウドー・ウルフコッテ (Udo Ulfkotte、昨年1月死亡) の、己れの恥を語る告白と併せ読むなら、事実は立体的にわかってくるだろう。

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/170807.pdf>

我が国の主流メディアも、CIAの監視の目が光っていることは間違いないが、どの程度に関係なのだろうか？ 向こうから見れば、抵抗される心配の全くない、世界でも最も安全で忠実な優等生なのではなかろうか？

Philip Giraldi

Global Research, January 18, 2018

American Herald Tribune, January 15, 2018

<https://www.globalresearch.ca/70-years-of-disinformation-how-the-cia-funded-opinion-magazines-in-europe/5626326>



ある情報局がフェイク・ニュースを拡散しようとするとき、それはニセ情報 disinformation と呼ばれる。それは隠密活動と呼ばれているもののサブセットで、基本的に、意見に影響を与えたり、敵対的と考えられる政府やグループの機能を妨げるために、外国で行われる秘密作戦である。

冷戦期間中は、ニセ情報作戦は、北大西洋条約機構と、ワルシャワ条約機構双方の、多くの主導的役者たちによって行われていた。時には、その活動とスポンサーの正体は、あまりにも明らかだった。たとえば Radio Free Europe と Radio Moscow が、相手方の同盟国が、いかにひどい日常生活をしているかについて、あけすけに皮肉を言うことがあった。しかし時には、世界で起こっていることについて、明らかにウソだが、大衆の考え方を換えさせるように仕組まれたストーリーを、メディアの中にひそかに取り込む、という方法も取られた。

ベトナム戦争は、完全な代理戦闘の場を提供したもので、米政府からストーリーが発せられると、その支持者たちは、民主主義の、全体主義に対する戦いという物語を提供したが、一方、共産主義圏は、植民地・資本主義の圧政に対する、自由を求める人々戦いという、正反対の物語を展開した。

米中央情報局 CIA は、その前身 OSS からの遺産として、ひそかな作戦行動というマントを引き継いだ。OSS は第二次大戦中、ニセ情報作戦を遂行してかなり成功していた。しかし、これには最初から、そのような計画を継続することに、かなりの反対があり、カネがかかると共に、誰の仕業かが露見したときに、かなりダメージのある逆風がくることが指摘された。西ヨーロッパでは、強力な国内共産党が、目ざとく、アメリカ情報局の失敗行動を公表したが、それにもかかわらず、彼らはニュースや情報メディアを操作して、ソ連やその同盟国に批判的な物語を創り出す能力を持ち、それが雑誌や本を資金援助するプログラムにつながっていった。これは、無視するにはあまりにも魅力的な条件で、物を書いてくれるジャーナリスト幹部を、探し出す能力をも意味した。

このような CIA のひそかな資金援助の組織については、かなりの事後調査の事実がわかってきた。「文化自由会議」Congress of Cultural Freedom はその一つで、ヨーロッパの作家や雑誌を援助した。最もよく知られているその対象は、「パリ・レビュー」や、ロンドンの「エンカウンター」である。共産主義に反対する熱の上がらない戦争は続いていたが、これは多くの愛国的な作家の支持する戦争であったので、雑誌を資金援助し、適切な記事を書いてくれる寄稿者を見つけることは、比較的たやすく、めったに反対はなかった。年配の編集者で、この援助がどこから来るのか、知っている人も、感づいている人もいたが、全く知らない人もいた。しかし、ほとんどの人々は質問をしなかった。なぜなら、その頃も今も同じだが、文芸雑誌のパトロンは、めったにいないからである。作家のほとんどは、この資金源について知らなかったが、彼ら自身の個人的な政治的信念に従って、書いた。CIA は、お金の価値を求めて、ある程度の編集方針を主張したが、それもあまり戦闘的でなかったのは、あまり干渉しないでうまくやるためには、そういう過程を許容することにしたからである。

オピニオン雑誌も難しかったが、新聞の世界に侵入することは全く別の話であった。低い、あるいは中間レベルのジャーナリストを見つけて、カネを払ってある記事を書かせることは容易かった。しかし現実の出版までの道筋は、昔も今も、それよりもっと複雑で、それが印刷されるまでに編集の数段階を経なければならない。ある最近の本が推定していることだが、CIA は、「少なくとも 1977 年以来、世界のあらゆる首都の、一つの新聞につき一人のエージェント」をもって、物語を生かしたり殺したりする命令を受けていた。ラテンアメリカとアジアの一部の首都では、アメリカ大使館と情報局が、物語を載せるかなりの力を持っていたのは確かだが、私の働いていたヨーロッパでは、記録はやや入り組んでいる。

大きなヨーロッパの新聞の上位編集者で、エージェントだと考えられる人物を、私は一人しか知らなかった。そしてその彼でさえ、フェイク・ニュースを載せることができなかったのは、編集委員会にも、新聞の持ち主である複合企業にも、彼は責任があったからである。彼はまた、CIA から給料をもらうことを拒否していた。ということは、彼の協力は自発的なもので、命令で動いていたのではなかったということである。

https://www.amazon.com/Finks-C-I-Tricked-Worlds-Writers/dp/1944869131/ref=sr_1_1?s=books&ie=UTF8&qid=1515951242&sr=1-1&keywords=finks_+how+the+c.i.a.+tricked+the+world%27s+best+writers
<https://ahtribune.com/us/fake-news.html>

CIA は確かに、ヨーロッパに、かなりの数のジャーナリスト“資産”を持っていたが、彼らは通常、非常勤の地方通信員か、中間レベルで、実際にニュースを作るには、限られた能力しか持たなかった。彼らを書いて掲載されるのは、あまり影響のない記事だった。実際、60年代、70年代の文芸雑誌の援助で、もっと直接のジャーナリスト・エージェントに発展し、地政学的な意味で、また冷戦そのものにおいて、相当の影響力を持ったことがあったかどうか、疑わしいと思う。

より陰険なのは、いわゆる「モッキングバード作戦」で、これは 1950 年代初期に始まり、大きなアメリカの刊行物やニュースメディアの協力を得て、多少とも公然と、共産主義者の“切り崩し”に対して戦った。しかしこの活動は、1975 年に、シーモア・ハーシュによって暴露され、さらに 1976 年には、Church Commission によって弾劾され、その後、CIA のアメリカの世論に動かす作戦は、不法行為となり、アメリカのジャーナリストをエージェントに使うこともまた、一般に禁止された。その他にわかってきたことは、情報局が、その設立の憲章を超えて、学生グループや反戦組織に潜入していたことだった。これは「カオス作戦」のもとで行われたもので、CIA の、完全にクレージーとは言わないまでも、かなり疑わしい、防諜活動の Czar James Jesus Angleton に主導されたものだった。

<https://ahtribune.com/human-rights/1086-outrageous-crimes.html>

政治の車輪が、一巡りして元の場所へ戻ることがあるが、我々は現在、ニセ情報の時代を元へ戻って、CIA を含む米政府の国家安全保障部局が、アメリカの世論を動かし、政治的反応を起こさせるように仕組まれた物語を、売りつけようとする時点にいる。ドナルド・トランプに関する Steele 文書は、その完全な例である。これは当時の CIA 長官ジョン・ブレナンによる、一連の故意の行動を通じて表面化した報告で、彼が就任する前に、大統領候補の評判を傷つけようとした、確かめようのない噂ばなしである。現在、議会がこの文書を調べ、誰がそれを命令し、支払ったのか、目的は何だったのかを突き止めようとしていることは、良い政治を願うアメリカ人にとって、間違いなくよい展開である。

(フィリップ・M・ジラルディは、元 CIA 対テロ専門家、トルコ、イタリア、ドイツ、およびスペインで、19年間、海外勤務した軍事情報士官でもある。1992年に、バルセロナ・オリンピックのための、CIA 基地主任を務め、2001年12月にアフガニスタンに入った最初の米人の一人だった。フィルは、国家利益評議会、すなわちアメリカの価値と利益に合致する、中東での米対外政策を奨励し推進する、ワシントン为本拠とする主導グループ、の理事長。)